クラス	TU305	担当教員	亀谷和史（かめたにかずふみ）
テーマ	「保育の質」と保育実践の研究――子どもの発達・子どもの権利を踏まえつつ		
著書･論文 研究課題等	『「知的な育ち」を形成する保育実践Ⅱ』（勅使千鶴・東内瑠里子共編著）（新読書社）2016年、『同Ⅰ』（勅使千鶴・東内瑠里子共編著）（新読書社）2013年、「アンリ・ワロンの人格発達理論における『機能連関』と『指向性機能』に関する一考察」（『日本福祉大学子ども発達学論集』第8号・2016年）、『現代保育と子育て支援―保育学入門（第2版）』亀谷和史編著（八千代出版）2008年、など。		

ゼ ミ ナ ー ル 概 要

キーワード：保育の質、子ども（特に乳幼児）の発達、子どもの権利、保育実践力、実践記録など

目的・内容：

皆さんは、「保育の質」と聞いて、どのようなことを思い浮かべるでしょうか。ベテラン保育者のように、子どもとうまく関わり、より良い保育ができるようになることを思い浮かべるでしょうか。実は「保育の質」とは、とても広くて曖昧な概念で、優れた保育を行うためのあらゆる内容や条件が含まれます。大宮勇雄先生は、少なくとも次の3つに区分して論じられる、と指摘しています。（大月書店『保育小事典』2006年、p. 306）

「①実際に保育が展開される中に含まれている要素としての**「プロセスの質」**（カリキュラムや施設環境などに加え、保育者と子どものかかわりの性質…）、②保育の制度的条件をさす**「構造の質」**（保育者の人数、クラスの子ども数…などをはじめとする保育条件）、③保育者の**「労働環境の質」**（賃金、仕事への満足度、ストレス等）」、

このゼミでは、まず、「保育の質」の内実を、①（プロセスの質）を主とする「保育実践」に焦点をあてて深めていきます。その際、「乳幼児の発達」と「子どもの権利」の追求を踏まえて保育の活動内容を検討していきます。保育実践力の向上をめざすために、身近な保育実践に即して、年齢別の「子ども理解」、「保育内容」、「実践記録」の読み方、書き方などを学んでいきます。

方法、ゼミの進め方：

テキストとしては、**加藤繁美著『保育実践力アップシリーズ：記録を書く人書けない人――楽しく書けて保育が変わるシナリオ型記録』（ひとなる書房）2014年**、を2019年度も前半で精読していきます。あらかじめスケジュールを決めて、毎回、グループで担当部分を精読し、さらに独自に学んだり調べたりした内容を加えて、要旨をまとめ、プレゼンテーション（発表）します。担当教員による特別講義（ミニ・レクチャー）も時々します。

ちなみにこの本の目次（章構成）は、次のような内容です。身近な実践が多く紹介されています。「1：実践記録ってなあに？、2：やってみよう!シナリオ型実践記録、3：子どもの声をどう聴きとるか、4：記録を書くと保育が変わる！、5：読みたくなる記録、伝わる記録、6：「小さな物語」を「大きな物語」へ」

担当教員からのメッセージ

◎夏休み後半にゼミ合宿を1泊2日、または2泊3日で予定しています。子ども発達学部開設以来、毎年、全国で著名な園に半日・一日見学実習に行っています。（今から合宿代2万~4万円を貯めておいてください。）
（＊ちなみに2018年度は、異年齢保育で有名な滋賀県野洲市のきたの保育園、2017年は園庭が有名な横浜の川和保育園に見学訪問に行きました。これまで行った園は、横浜の安部幼稚園、多摩市のこぐま保育園、京都市のたかつかさ保育園、同じく京都市のさくらんぼ系のみつばち保育園などです。）

○保育園・幼稚園、認定こども園などにテーマを定めて、グループ別に見学や体験実習も予定しています。

○後期では、「保育に質」に関して、グループあるいは個人で課題（サブテーマ）を決めて、関連する文献から調べたり学んだりして発表します。そして4年次での卒業研究の準備に向けて、理論研究に取り組みます。

○参考文献としては、泉千勢編著『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』（ミネルヴァ書房）、堀尾輝久著『子育て・教育の基本を考える――子どもの最善の利益を軸に』（童心社）2007年など。ゼミで紹介します。

＊「保育実践力」とは何かを深めたい人、「保育に質」について研究したい人、あるいは乳幼児の発達や権利に関心のある人、学ぶ意欲とやる気のある人は歓迎です。しっかりと、志望動機（エントリーシート）を書いてください。